テレビの座るべき場所

――主体的情報選択へ――

藤村久雄

JOGKの名前で親しまれているNHK九州本部は、ことしの六月十六日、開局五十周年を迎えた。

九州における放送の先駆けとなったJOGKに、この五十年間変わらぬご支持とご理解をいただいた視聴者のかたがたに感謝の気持ちをこめて、六月は記念番組や催物を集中的に編成した。

六月二十日の夜、熊本市民会館に国文学者の池田弥三郎氏と、俳人の楠元憲吉氏を招いて開いたNHK文化講演会もその一つであった。

当日は、期から台風三号の接近が伝られるあいにくの空模様で、主催者側としては、入場者の多少を心配したのであったが、結果は市民会館大ホールの二階前席までを埋めるという盛況で、ほとんどの人が熱心にメモをとっておられた。

私はそこに熊本の人たちの知的関心の高さを感じたのであったが、講演会の終わったあと二人の講師とも、聴衆の態度のよいこと、そして熱心なことを挙げて最近になく力を入れて話をした、と感想を洩らされたのには、私も主催者側というより熊本県民の一人として嬉しく思ったことであった。

しかし、このように県民の知的関心、知的水準の高さを示す例がある一方では、NHKが行った熊本県民のテレビ視聴率調査で、視聴番組のベストテンはすべて娯楽番組というデータが出ていることも事実である。

〝テレビは娯楽〟と割り切ってしまえば、それはそれでよいのかもしれない。

だが、現代は多様化する人びとの意識、複雑化する社会の動きの激しい時代であり、これに拍車をかけるかのように、さまざまな情報がはんらんしている情報化社会でもある。

自分を中心にした狭い範囲の情報だけで生きて行ける時代ではなく、はるか遠い国の情報がくらしを左右するような時代である。

たとえば「アフリカのゴマ戦争」というのがある。「アフリカにあるエチオピアとソマリアは紛争を起こしているが、この紛争のとばっちりを受けてゴマの値段がはね上り、ゴマを原料とするふりかけや、ゴマ油が値上りしそうな状況である。日本のゴマはその九〇パーセントが輸入品で、その七〇パーセントがエチオピア、スーダン産なのである。

アフリカという遠い国での紛争という国際情勢の一つの変化が、日本に住むわれわれのくらしを直撃しようとする――現代はそういう時代なのである。

熊本県では昭和三十三年の三月、NHKのテレビ放送が始まった。当時のテレビ契約件数は三、一八二件、そして、ちょうど二十年が過ぎたことしの三月末現在、県内の契約件数は四二六、五七六件、実に百三十四倍という増加である。

この数字からみても、テレビはもはやわれわれの生活にとって切り離せない存在となっているのである。

そして、このテレビは、報道、教養、教育、娯楽の各分野にわたって実におびただしい情報を流しつづけている。少しでも気を許せばこの膨大な情報の渦の中にたちまち巻きこまれてしまいそうである。

しかし、これほどの豊富な情報の中にいながら、真の情報がほしいと訴える人も多い。

また、テレビの情報量が多すぎると言う人も多い。これらの現象をわれわれはどう考えるべきなのだろうか――。

わが国でテレビ放送が始まって二十五年。熊本県でも二十年の歴史がすぎた。

われわれはこの歴史の経験の上に、もうそろそろ〝テレビの座るべき場所〟を考えてもよいのではないだろうか。

〝テレビの座るべき場所〟つまりテレビの機能を考えるべき時期にきているのではないだろうか。

たしかに、テレビは放送開始からしばらくは娯楽の手段として考えられた時期があった。

この考え方は今でも残っているかもしれない。だがテレビのこれまでの歴史のなかで、情報伝達の機能面がより強く意識されつつあるように思える。

問題はテレビの送り出す情報を受け身で捉えるのではなく、視聴者のひとりひとりが能動的に一つの目的意識を持って相対することが必要ではないかと思う。

つまり、情報選択に主体性を持つことである。自分の意志でチャンネルを選択することである。その時初めてテレビの情報が自分自身のものとなり得よう。

放送の送り手の側の一人として、受け手の皆さんといっしょに私も〝テレビの座るべき場所〟を考えていきたい。

（NHK九州本部長）

くまもとの文化財

県指定天然記念物

＝滴水のイチョウ＝

鹿本郡植木町

アーおどんが滴水はよ
末広がりだよ
力合わせてよ
銀杏の木さんを
囲みニコ〳〵
囲みニコ〳〵助け合う
みんな仲良く暮らそうよ
（銀杏の木音頭より）

と歌われ、親しまれている滴水のイチョウは、植木町滴水の丘の上に一きわ高く（約四十㍍）そびえている。ひこばえを含む幹囲は一二・五㍍もあり、その根元には享禄三年（一五三〇）及び天文二年（一五三三）の銘を刻む板碑からして、当時既に巨木であったと思われる老木であるが、今なお青青とした枝葉を伸ばしている。

毎年春三月二十六日にはイチョウの木さん祭りが行われ、秋の落葉の時期を麦播種の時期とするなど、地域社会と密接な関係をもっている。

（昭和五十三年六月九日県指定告示）